

野菜の経営的性格による分類

1. 調査のねらい

本県が首都圏農業を推進する中、野菜産地形成は重要な課題である。そこで、野菜導入にあたっての品目選択の参考資料を得るため、上三川町の野菜生産農家に導入されている野菜を経営的性格により分類した。

2. 調査方法

上三川町の野菜生産農家3戸を調査対象に、導入されている11品目の野菜について、労働時間および生産コストについて経営記録簿の記帳、既存資料の整理および聞き取りにより調査した。得られたデータを労働時間を主指標に、所得および在圃期間を副次指標として、野菜の経営的性格により3グループに分類した。

3. 結果および考察

(1) 野菜の経営的性格の分類

1) 労働集約型野菜〔Ⅰ型〕

10aあたり労働時間が約450時間以上の野菜で、主として施設野菜が属する。なかでもいちごは、1,915時間と他よりも多く、作業別労働では収穫調整が約半年間連続し労働の約6割を占め、所得は410万円で最も高い。にらは、労働時間1,099時間と多く収穫調整に労働の6割が投下されるが、収穫はいちごとはちがい間欠的である。また、在圃期間は最も長く、所得は158万円がいちごに次いで高い。トマトは、労働時間576時間であるが、所得は100万円と高い。きゅうりは、労働時間約500時間とⅠ型中では最も少なく、在圃期間が短いため、作型の組合せにより、土地利用効率を高め高収益をあげることができる。

2) 中間型野菜〔Ⅱ型〕

労働時間が150～450時間未満の野菜である。春レタスは労働時間266時間、所得約75万円、在圃期間は170日と比較的長い。ゆうがおは労働時間244時間、所得約30万円で、在圃期間は120日と短い、このグループは、収穫期間が2カ月程度で終わるが、作業別労働配分で見ると収穫調整時間に多くの労働を必要とし、その期間だけ集約的となる。

3) 労働粗放型野菜〔Ⅲ型〕

労働時間が150時間未満の野菜であり、主として露地野菜が属する。所得は低いが他の野菜と組み合わせた体系で圃場の有効利用作物として選択される。秋レタスは146時間で、在圃期間は品目中最も短い。かぼちゃは109時間で所得は低い。スイートコーンは107時間で所得は低い。キャベツは73時間と少なく在圃期間も短い。たまねぎは61時間と最も短い但在圃期間は比較的長い。

4. 成果の要約

野菜の経営的性格について、労働時間を主指標として分類した結果、集約型野菜、中間型野

菜、粗放型野菜の3グループに分類できた。農家が野菜の品目を選択する時には、それぞれの家族労働の合理的かつ効率的な活用と土地の有効利用を図るため、各グループの野菜を組み合わせ、所得を高く確保できる品目が導入されている。

(担当者 企画経営部 石井康夫)

表-1 主要野菜の経営面からみた分類

グループ	作物名	労働時間	所得	在圃期間	物財費
I. 労働集約型野菜	いちご	1,915時間	4,104千円	260日	1,106千円
	にら	1,099	1,583	520	247
	トマト	576	940	150	560
	きゅうり	472	696	120	363
II. 中間型野菜	春レタス	266	746	170	110
	ゆうがお	224	297	120	106
III. 労働粗放型野菜	秋レタス	146	727	80	106
	かぼちゃ	109	55	100	145
	スイートコーン	107	189	150	83
	キャベツ	73	306	120	44
	たまねぎ	61	45	200	54

注) 平成3年産で、労働時間は10a当たりの数字である。

I型：労働時間 450時間以上、II型：150～450時間未満、III型：150時間未満

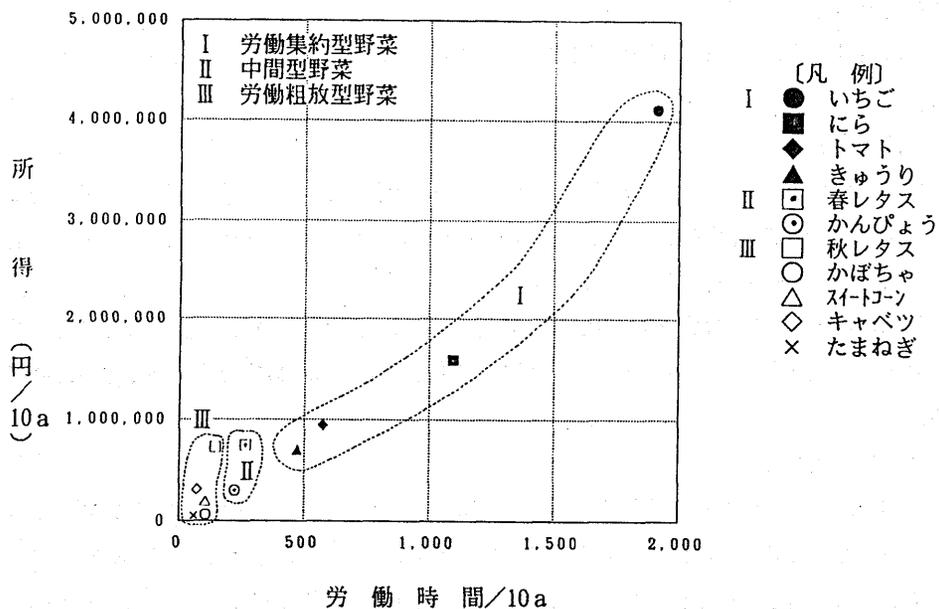


図-1 各野菜の労働時間と所得の関係